

熊本地震から1年

医療法人社団順幸会阿蘇立野病院 / 上村ぬくもり診療所 上村晋一

あの悪夢のような熊本地震から1年が経過しました。当院は本震の平成28年4月16日(土)に病院避難を実施し、間もなく職員を解雇し新規の診療所を立ち上げました。しかし避難した本院での本格的な診療は未だ可能な状況とはいえません。

病院は阿蘇と熊本・大津を隔てる外輪山と外輪山の緩やかな峡谷に位置しており、眼前の阿蘇市へ向かう国道57号線を300mほど登ると、南阿蘇から県道325号線が阿蘇大橋を介して合流しています。しかし、平成28年4月16日(土)午前1時25分のM7.3の熊本地震本震により、その阿蘇大橋および国道57号線が崩落してしまったのです。また、職員は発災当時まで180人(正規約140人、で阿蘇地方(阿蘇市と南阿蘇)と熊本・大津地方の3地域にほぼ3等分に分布)いましたが、この地震により断腸の思いで解雇をせざるを得ませんでした。

さてライフラインの途絶、外輪山の一部である裏山の崩落の危険により決断した病院避難からほぼ1年経過しました。平成29年3月末現在、電気、通信は回復するも完全な上下水道の復旧には至っていません。したがって当院に関しては、病院避難は妥当だったと思われる。また、先ごろ裏山の補強工事の予算が計上され、2年かけて完了するという計画が発表されました。裏山が整備されるまでは梅雨や台風による避難勧告や指示に関して、行政を中心とした関連部署と調整していかなければなりません。さらに病院のある立野地区は長期避難世帯に指定され、ほぼ全世帯が仮設住宅あるいは、みなし仮設住宅に同居しています。立野地区に限らず、避難解除になったとしても果たして全村民の1割を占める避難住民は戻ってくるのでしょうか。ライフライン(特に上下水道)の復元の速さがポイントになるのはいうまでもありません。

病院建物は幸いにも倒壊を逃れ、5年前に新設した新館は平成29年4月いっぱいでの補修を終えます。また、透析と22床の病床を有した東館も9月までには補修を終える予定です。しかし、昭和54年に建てられた西館も3月末日にやっと精査が終了しました。というのも調査する建築会社が見つからなかったのです。少なくとも公的役割を担っている病院等に対しては、発災後迅速に調査等の対応が優先的になされるよう法的整備が必要と切に感じています。現段階では少なくとも業者には責任はないはずですし、むしろ頭が下がる思いです。

建物のみならず補修に係る経費はその四分之三が公的なグループ補助金という公金で助成されるのはもちろん非常に有難いことでもあります。しかし、地震の残した影響というのは当然ながら補修のみで終わる話ではありません。病院自体の収入は全く途絶えるため、借入金返済あるいは給与支払いができなくなるのは言うまでもありません。当院に関して

言えば、昨年6月に新しい診療所を立ち上げましたが、病院再開時も視野に入れた地元の職員約30人の再雇用の人件費も確実に経営を圧迫しています。公的な助成がない現在、取引のある金融機関との関係が抜き差しならぬ関係に発展する可能性も否定できません。すなわち体力のない民間医療機関は匙を投げだす危険性も十分含んでいます。約40年間にわたって父の代より公的な役割を担ってきて、その間に税金もそれなりに納めてきた立場としては、公的な助成を何とかしてほしいと祈らざるを得ません。

同様に問題なのが、平成29年4月現在、職員募集を行っているのにも拘らず、わずかな数人しか応募がないことです。いくらハードが復旧したとしてもソフトが充足しなければ絵に描いた餅に過ぎません。解雇した職員に対しては再就職支援センターを自ら設置して支援したのは、つい約11ヵ月前です。復旧の狼煙を上げたものの、戻ってくる職員がないというのは、自身の不徳の致すところとはいえ堪え難いものがあります。こういう時期にこそ復興支援を共にして頂ける看護師などの医療人が必要だと切実に思うのは私たち病院だけでなく地域も同様であります。何度も申し上げます。志のある医療人の助けを必要としています。どうかご協力ください。

ところで前記のグループ補助金とは、経済産業省の中小企業庁が管轄する「中小企業等グループ施設等復旧整備補助事業」の補助金のことです。どうして経済産業省がわれわれ病院を救ってくれるのでしょうか。「経済」という単語が、中国古典の「経世済民」を略したもので「世を経（おさ）め、民を済（すく）う」の意であると聞いて一人で勝手に納得しました。まさしく「民」を「済」ってくれる有り難い政策なのです。

地震からひととおり四季を経ましたが、この1年は実に自然への畏敬の念をいやというほど身をもって感じさせられました。しかし世界一災害が多いとされる日本では、どれだけの先人がこのような苦難に耐えて乗り越えてきたのでしょうか。同じDNAを持つ子孫としていかなる対処をなすべきか。その答えはそこら中にあるに違いありません。「どん底を外から眺める景色とどん底から見る景色とは全く違う。このどん底の景色を見てこそ真の慈悲の心が生まれてくる」。鎌倉円覚寺横田南嶺管長からお聞きした有り難い一文です。今後も復旧、そして創造的復興を目指してコツコツと頑張ります。